

リョービイマジクス株式会社の前身としての有限会社晃文堂が神田鍛冶町に創立されたのは1947年11月18日とされている。

しかしすでにその1年ほど前(1946年9月15日)から敗戦の焦土をかきわけて北区王子神谷町の山口木材工業所の一角に建てた5坪ほどのバラックをちいさな工場にあてて、戦災による焼損機ではあったがトムソン型活字鑄造機 Thompson Type-caster(林栄社製)と、手回し式のブルース活字鑄造機 Bruce's pivotal typecasterを修理しながら、ほそぼそと活字鑄造がはじめられたことは意外に知られていないようだ。

たまたま『こうぶん』と題する晃文堂時代のふるい社内報のつづりを見る機会を得た。そこに「晃文堂20年の歩み」と題して、晃文堂すなわち現在のリョービイマジクスの創業者・吉田市郎(Ichiro Yoshida 1921.1.28-)が1969.11(vol.18)–1970.1(vol.19)と2回にわたって同社の創業時代を回顧する記事を寄稿している。その記録をしばらくおってみよう。

吉田市郎は戦時中の1942年9月に名古屋高等商業学校(現名古屋大学経済学部)を繰り上げ卒業して三井物産に就職したもののまもなく戦地に駆り出された。軍隊とはいってもおもには経理畑を担当して、1945年8月15日の敗戦時には東京の第一航空軍司令部経理部に勤務する主計少尉として終戦を迎えた。

東京で召集解除となった吉田は三井物産に復職したものの、GHQ(連合軍総司令部)によって同社が財閥解体を命じられたために2ヶ月あまりで退社を余儀なくされた。そこでやむなく軍隊時代の縁をたどって神田神保町の明和印刷株式会社の営業

走れメロス

メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らして来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律儀な一牧人を、近々、花婿として迎える事になって来た。結婚式も間近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣装やら祝宴の御馳走やらを買いに、はるばる市にやって来たのだ。先ず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかったのだから、訪ねて行くのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、まちの様子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれどもなんだか、夜のせいばかりでは無く、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になって来た。路で逢った若い衆をつかまえて、何かあったのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたって、まちは賑やかであった筈だが、と質問した。若い衆は、首を振って答えなかった。しばらく歩いて老翁に逢い、こんどはもつと、語勢を強くして質問